

=====

THE VEDANTA KYOKAI
ヴェーダーンタ協会
日本ヴェーダーンタ協会の最新情報
2004年4月 第2巻 第4号
<http://www.vedanta.jp/multimedia/pdf/newsletter/index.html>

=====

目次

- ・ かく語りき 聖人の言葉
- ・ 今月の予定
- ・ 3月の例会
- ・ スワミ、多治見で講話
- ・ 今月の思想
- ・ 音楽交流会
- ・ 忘れられない物語
- ・ スワミ、別府を訪問

.....

かく語りき 聖人の言葉

「神への愛は、五感の対象への執着がなくなるにつれ大きくなる」
シュリ・ラーマクリシュナ

「豊かさの源は、大きな財産ではなく満ち足りた心である」
預言者マホメッド

.....

今月の予定

生誕日：
シュリ・シャンカラチャリヤ 5月24日

協会での催し物：
例会 4月18日(日)
講話 午前11時
プ拉萨ード(昼食) 12時30分
質疑応答 午後3時

.....

3月の例会

シュリ・ラーマクリシュナ 第169回生誕記念日祝賀会

日本ヴェーダーンタ協会は、3月21日(日)逗子センターで、シュリ・ラーマクリシュナの第169回生誕記念日祝賀会を開催しました。当日のプログラムは朝6時のマンガラ・アラティ、讃歌、瞑想で始まりました。参加者は10時を過ぎた頃から次第に集まり始め、10時半に礼拝室でスワミ・メダサーナンダが供物を、皆で瞑想しました。

11時になると、スワミは礼拝室と一続きになった集会室に移り、午前のプログラムを始めました。讃歌の斉唱、英語と日本語による「シュリ・ラーマクリシュナの福音」の朗読に続いて、スバス・ムコバグアイ氏がディネシュ・チャンドラ氏のタブラに合わせ讃歌を歌われました。ここでスワミジは、来賓のマニラル・トリパティ駐日インド大使を紹介しました。

はじめにトリパティ大使は、「シュリ・ラーマクリシュナの残した霊的遺産の本質にあらためて専心する」ことが、生誕記念日であるこの日に私たちがシュリ・ラーマクリシュナに捧げることのできる、最高の敬意であるとおっしゃいました。そして、次のように続けられました。「では、シュリ・ラーマクリシュナの教えとは何でしょう。シュリ・ラーマクリシュナが残してくださった霊的遺産の本質とは何でしょう。」

「シュリ・ラーマクリシュナの御言葉の奥深さは、その簡潔な言い回しにあります。シュリ・ラーマクリシュナは、最も複雑な哲学的命題を誰もが簡単に理解できる言葉で説明する、という素晴らしい天賦の才を持っていらっしゃいました。」
「シュリ・ラーマクリシュナが教えてくださったのは、宗教とは家ではなく道だということです。目的地にたどり着くために進んでいく道なのです。目的地は同じでも行き方は何通りもある。シュリ・ラーマクリシュナは宗教の真理をこのように簡単に説明されました。この真理が正しく理解されれば、自らの宗教だけを正しいとする、凝り固まった宗教論争を繰り広げる余地はなくなり、不和はなくなるでしょう。宗教という名の下に血が流されることはなくなるのです。」

またトリパティ大使は、シュリ・ラーマクリシュナが新たな宗教を説いたのではないことを指摘されました。シュリ・ラーマクリシュナは、一人一人が自らの信念に従い、大きな愛によって自らの使命を全うすること、すべての他人を理解し愛することを願ったのです。「ヴィヴェーカーナンダが人生を捧げて人々に広めた、気取りのない英知に満ちた師の御言葉は、私たちが理性ある正しい道に連れ戻してくださるのです。」

そして、トリパティ大使は次のようにお話をまとめられました。「スワミ・ヴィヴェーカーナンダとラーマクリシュナ・ミッションは、カルマヨーガ(働きのヨーガ)を理念の中心にすえています。この理念は誰もが簡単に理解できます。『利己的な動機を持つことなく、自分にできるあらゆる方法で、他人に仕える』ことなのですから。これこそ、真理を会得する最も確実な道です。宗教の人的側面に自らを捧げることこそ、シュリ・ラーマクリシュナやスワミ・ヴィヴェーカーナンダが残された霊的遺産を、尊び、守ることになるのです。奉仕と調和の精神をよみがえらせ、育み、広めていきましょう。」トリパティ大使は、最後に、バガヴァッド・ギーター第6章の詩を引用してスピーチを結びました。

スワミはトリパティ大使にお礼を言うと、大使のスピーチにあったラーマクリシュナ僧団の奉仕の精神と、僧団創設時のエピソードについて話し始めました。インドでは仏教が衰退して以来、宗教に無関係な救済活動や奉仕の精神はあまり重要視されておらず、僧団創設当時もそのような風潮だったそうです。

ラーマクリシュナ僧団の僧らは、社会的階層や宗教、人種の区別なく誰にでも奉仕し、病人の世話、病院の掃除など奉仕の精神において必要とされることはすべて行いました。そのため、当初、僧団の僧らは僧侶の中でも「最低クラス」と位置づけられてしまいました。しかし、僧団が献身的な奉仕活動を続け、スワミ・ヴィヴェーカーナンダがシュリ・ラーマクリシュナの教えを広めるにつれ、僧団は徐々に注目を集めるようになり、同時に、僧団に対する周囲の見方も変わっていきました。今日では、ラーマクリシュナ僧団を馬鹿にし除け者扱いした他の修道会も、奉仕の精神の下に病院や診療所を運営するようになったそうです。

次に、スワミは「シュリ・ラーマクリシュナの魅力」について話し始めました。「この方の魅力は質素ですが実に奥深いものです。あの写真を御覧なさい。」スワミは背にした壁の、花で飾られた写真を指差して言いました。「一見したところでは、注目に値するようなものは何もありません。とりわけハンサムというわけではないし、ひげさえ剃ってない。身なりもどうということはありません。」スワミはにっこりして言いました。「しかし、見る目のある人にとっては、特別なものを秘めているのです。」

「実はシュリ・ラーマクリシュナは、ドクシネシュワルで近隣の人々から生涯、『カーリー寺の気違い坊主』と呼ばれました。しかし、ナレンドラ、すなわち後のスワミ・ヴィヴェーカーナンダはシュリ・ラーマクリシュナにどうしてもなく魅かれていました。ナレンドラは、自分に大変目をかけてくれたあるキリスト教徒の教授に、なぜ一介の僧にすぎないシュリ・ラーマクリシュナのところにそんなにも熱心に通うのかと尋ねられたとき、こう答えたのです。『先生、どうすることもできないのです。どうにも抵抗しようがないのです。』」

「また、高名な宗教的指導者で雄弁家のケシャブ・チャンドラ・センは弟子と共にドクシネシュワルを訪れ、シュリ・ラーマクリシュナの話に聞きほれたものでした。ケシャブの弟子の中には、ケシャブがただ黙って話を聞いているのに戸惑い、ケシャブに意見を言わせようとせつづく者もいました。しかしケシャブは、自分の意見を差しはさむのは『鍛冶屋に針を売るようなものだ』と言い、弟子を黙らせ話を聞くよう命じました。」

「弟子たちはシュリ・ラーマクリシュナに議論を吹っかけ戦いを挑みましたが、結局降参しました。彼らは、シュリ・ラーマクリシュナが自分たち以上に自分たちのことが分かっている、と気づいたのです。弟子たちはガラスの箱のようなもので、シュリ・ラーマクリシュナには彼らの現在・過去・未来、意識・潜在意識などすべてがお見通しでした。同時にシュリ・ラーマクリシュナは、人生の至高の目標や真の自由を、惜しみない無私の愛によって彼らに伝えました。シュリ・ラーマクリシュナと長い時間を共にしたスワミ・ヴィヴェーカーナンダでさえ、『シュリ・ラーマクリシュナの奥深さを推し量ることなど到底できない』と語っています。」

スワミは最後に、世界中のヴェーダーンタセンターや家庭に祀られているシュリ・ラーマクリシュナの写真について、あるエピソードを紹介しました。シュリ・ラーマクリシュナは、信者らがシュリ・ラーマクリシュナの写真を撮りたいと言い出したとき、その提案を断りました。しかし撮影の手はずは大胆にも整えられ、写真屋がドクシネシュワルにやって来ました。シュリ・ラーマクリシュナは撮影を断って部屋を出、ヴィシュヌ寺院のテラスに座りました。ここで、たまたまそこに居合わせたナレンドラが助け舟を出しました。彼はすぐに師と霊的な会話を始めたので、師はサマディに入りました。するとナレンドラは直ちに写真を撮るよう命じました。後でシュリ・ラーマクリシュナに写真を見せると、シュリ・ラーマクリシュナはその写真がサマディの最高状態で撮影されたものだと言いました。

「ですから、このシュリ・ラーマクリシュナの写真は、きわめて平凡で何の変哲もないように見えますが、信者や霊的求道者、霊的にレベルの高い人たちにとっては、非常に魅力のある、特別なものなのです。」とスワミは結びました。

午前のプログラムが終わると、皆でブラスード（昼食）をいただきました。この豪華なブラスードは、シャマル・カール、リタ・カールご夫妻のご好意によるものです。逗子センターで行われた今回の祝賀会は参加者の新記録を樹立し、多くの日本人を含め、100人以上が集まる盛大なものとなりました。ブラスードの後、そのまま午後のプログラムの音楽交流会に残る人が数多くいました。（「音楽交流会」の項をご参照ください）

.....

スワミ、多治見で講話

2月28日（土）岐阜県多治見市において、マハラジによる、この地区初の講演会が行われました。参加者32名。子供も小学生から高校生まで8人参加。質疑応答20分と瞑想5分を含め3時間の講演はとても楽しかった、と大人はもちろん子供たちも非常に喜んでくれました。お祈りの後インドと日本の関係や、ヒンズー教についての基礎知識、心の平安について学びました。講演後マハラジに自家製和食を召し上がっていただきました。とても貴重な楽しい一日でした。

（上野理絵さん寄稿）

.....

今月の思想

私たちがやろうとしないのは
物事が難しいからではなく、
私たちがやろうとしないから
物事が難しくなるのだ。

（セネカ）

.....

音楽交流会 楽しいひと時

シュリ・ラーマクリシュナ第169回生誕記念日祝賀会では、音楽交流会も行われました。協会の信者やご友人の方々が、サンスクリット語、ベンガル語、日本語、英語で歌を歌い、さまざまな曲目を演奏しました。

昼食後2階の集会室と礼拝室は、「この音楽会を成功させよう」という皆の思いでいっぱい。準備に追われ、てんてこ舞いの状態になりました。

いつも協会のために音楽関連のボランティアをやってくくださる、プロのサウンドエンジニア鈴木敦さんの指揮の下、礼拝室にはカーペットが敷きつめられ、アンプやミキサー、MD/CDプレーヤー、マイク、スタンド、スピーカー、楽器が所狭しと並べられていきました。プログラム開始の3時も近くなると、庭や部屋など逗子センターのあちこちから、本番前のリハーサルの音や日本式の発声練習の声が

聞こえてきました。来場者は皆、思い思いの場所を陣取り、会場である礼拝室・集会室の後ろのほうに固まってしまったので、スワミ・メダサーナンダがいつものように、「もっと前のほうに来てください」「ここに座ってください」「後ろの人、見えますか」と皆に声をかけました。

スワミは、皆がちゃんと座れたことを確認すると、歓迎のあいさつをしプログラムを開始しました。最初の讃歌は、スバス・ムコパダヤ氏（カナダより来日）、ご子息のシュミット・ムコパダヤ氏（4月に日本を出発）、逗子センター常駐・「もっくん」の名でおなじみの千葉茂一氏の主導で行われました。讃歌の終わりのほうではステージ上の3人に、協会の友人で当日のスペシャルゲスト、タンプラー奏者のイノウエ・ケンジ氏も加わりました。

シュリ・ラーマクリシュナの御前で行われたこの演奏会は2時間半のプログラム。演目は、豊かな声の持ち主・サムドゥラ・ダッタ・グプタ氏によるハルモニウム弾き語り、人気のリタ・カールさんによるハルモニウム弾き語り、再びスバス・ムコパダヤ氏の歌、美しく軽やかな歌声・アナンニャ・カルマカールさんの歌、泉田香穂里（シャンティ）さんによる自作の日本語の歌、ロニー・ハーシュ氏による、この祝賀会のためのオリジナル曲「I Take Your Name（御名を唱えて）」の披露と全員参加の英語の斉唱曲（作詞ラビンドラ・ダックス氏）でした。演奏会のフィナーレを飾ったのは、井上氏とディネシュ・チャンドラ氏（東京初来訪）のお2人による、シタールとタブラの演奏でした。お2人はプロのミュージシャンで、今回が初顔合わせでしたが、何日も前からリハーサルを重ねていたかのように息もぴったりの演奏でした。

プログラムの後、紅茶がふるまわれ、参加者やゲストは皆それぞれ帰途に着きました。

.....

忘れられない物語

日々是禅（ひびこれぜん）

禅宗の僧侶は、師の下で最低10年の修行を経て、人に教えを説く身となります。ある日、修行を終え導師となった天応（てんのう）は南隠（なんいん）を訪ねました。その日は雨が降っていたので、天応は下駄を履き傘をさして行きました。天応を部屋に通すと、南隠はあいさつをして言いました。「天応殿は、下駄を脱がれた折、その脇に傘を置かれたはず。さて、左右どちらの脇に傘を置かれたかな。」

天応は答えに窮し、言葉が出ませんでした。そして、自分が禅の精神を忘れ、物事をなおざりにしたことに気づきました。天応は南隠の弟子となり、さらに6年修行をして、片時も禅の精神を忘れない「日々是禅」の境地に達しました。（Zen Traditions「禅伝聞集」より）

.....

スワミ、別府を訪問

去る3月14日（日）、スワミ・メダサーナンダ・マハラージをお迎えして、昨

年に続き、別府での2回目のサットサンガが開かれました。13日夕刻に大分県別府市に到着されたマハラージは、14日午前、別府市在住の信者たちと熊本から参加した信者たちのために小さな集まりを持って下さいました。「抜粋ラマクリシュナの福音」の輪読をする私たちに、マハラージは福音の解説をなさいました。その後、マハラージによるバクティヨーガのためのガイディングメディテーションが日本語で行われました。マハラージを中心に、久々に会う仲間たちと一緒に静かな時間を持つことができました。

午後からは、「インドの聖者たちの生涯と教え」というテーマで講演会が開かれました。今回は有名な女性の聖者「ミラ・ミラバイ」のお話をマハラージにいただきました。主クリシュナの信仰者であるミラバイの受難と、それに打ち勝つミラバイの強い信仰のお話を、彼女の作った詩を紹介しながら話していただきました。通訳は主催者の一人でもある立掘尚子さん。マハラージとの息もぴったりの通訳でした。

質疑応答に入る前にマハラージは私たちの強い願いに応じて、タゴールのディボーショナルソングを歌って下さいました。マハラージの歌は私たちの心に深く沁みわたりました。講演の後マハラージは「講演は知識を使います。けれど歌はハートを使いますから、切り替えがとても難しいです。」とおっしゃっていました。私達を喜ばせるために無理をなさったマハラージに申し訳なく思いつつも、歌を聞くことができ私達はとてもうれしかったです。お茶の時間には別府市在住のインド人信者によるラマクリシュナの歌、日本人信者によるベンガル民謡も披露されました。

今回、マハラージは日本語でラマクリシュナ・ミッションの紹介（約20分）をされました。また、講演の中でも日本語をたくさん交えてお話をして下さいました。マハラージのジョークに会場には何度も爆笑が起こり、そのおかげで参加者は皆うちとけてなごやかなサットサンガとなりました。

参加者は大分県在住の方を中心に長崎、熊本の方々・合わせて30名でした。「信仰の数だけ悟りの道がある」というマハラージのお話に感銘を受けたという感想を持たれた方、聖者の生涯を本ではなく言葉で聞ける機会はないので良かったという方、質疑応答の中での「体と心と精神のバランスが大切」というお話がよく理解できたという方など参加者の色々な感想がありました。次回のサットサンガを早くも心待ちにしているようでした。

翌日は宇佐市にある日本八幡宮の総本山「宇佐神宮」へ参拝に訪れました。足早に行く私たちにマハラージは「古代の波動を感じていますか？」とお聞きになりました。波動を感じながら参拝することは大切なことですね。参拝をすませ、池のほとりに着いたとたん、マハラージはすばやく平たい小石を見つけ「石投げ」（石に水面をびよんびよん跳ねさせる遊び）を始められました！なんと5回も石が跳ねて飛んでいったのにはみんなびっくり、大拍手でした！！

3日間の短いご滞在でしたが、私たち信者にとってはマハラージと一緒にご飯を食べたり、講演会場へ行く途中、古い家並みが残る住宅地を散歩したり、なにげない時間がとても楽しい思い出となりました。

（神力美智子さん寄稿）

Fax : 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp

[KENB011J]

ニュースレターをご希望でない方はこのまま返信してください。メールアドレスを削除します。

=====